

令和元年度 第1回 屋久島世界遺産地域科学委員会  
議事要旨

日時：令和元年7月10日（水） 9:00～12:00

場所：屋久島文化村センター レクチャールーム

●議事(1)平成30年度第2回屋久島世界遺産地域科学委員会議論の整理

資料1 平成30年度 第2回屋久島世界遺産地域科学委員会議論の整理

- ・「協力金体制を整理して、ある程度体制を確立しても解決しない場合には地域自然資産法の適用とするべき」という意見は、まずは協力金体制の確立を最優先とするべきというニュアンスで発言したものの、資産法を検討すべきというような逆転された意見になっている。書き換えが必要ではないかと思う。（柴崎委員）
- ・資料1にある回答や意見については、委員会である程度の確認をしてから次の議論に進むべきである。（土屋委員）

●議事(2)屋久島世界遺産地域管理計画の実施状況について(報告及び意見聴取)

資料2 屋久島世界遺産地域管理計画に基づく事業実績と令和元年度事業予定

●議事(3)令和元年度屋久島世界遺産地域モニタリング調査等予定表について(報告及び意見聴取)

資料3-1 平成30年度屋久島世界遺産地域モニタリング調査等結果(概要)(環境省)

●議事(4)平成30年度屋久島世界遺産地域のモニタリング調査結果(報告)

資料4-1 平成30年度 屋久島世界遺産地域管理計画に基づく事業及びモニタリング調査等結果報告

資料4-2 平成30年度 屋久島世界自然遺産地域における森林生態系に関するモニタリング調査結果

- ・縄文杉周辺も、シカ柵の効果で徐々にいろいろな木が生えて回復、再生しつつある。一方で、縄文杉が見えなくなるという可能性もある。展望デッキもあり、観光の中心でもあるので、公園管理として、ある程度刈り込むのか、そのまま放置するのか、将来的な理想像を定めるべき。（大山委員）
- ・シカ柵の取扱いは、今後考えなければならない問題。シカ密度が下がったときに、例えば縄文杉の周りがかかり回復してきているのであれば、そこを一定期間シカが入れないようにして、どのくらいの頻度で食われて、どういう形でバイオマスが減っていくか、あるいは種数が減るのかというモニタリングをすることも一つの選択肢。（矢原）
- ・各種問題について、対症療法的な対策ではなく、将来的にどこを目指すのかという大きな展望を持って取り組むべき。（大山委員）
- ・忌避植物であるシャクナゲに食痕が見つかったとのことだが、真偽を確かめるために糞などの調査をしてほしい。（荒田委員）
- ・高標高域のヤクシカの糞からはツツジ科の植物のDNAが出ている。今後種を特定したい。高標高域でのヤクザサやシャクナゲの食害は、奥岳の植生に大きな影響があるので、引き続き注意してモニタリ

ングしてほしい。(矢原委員長)

- ・大台ヶ原では、シャクナゲは現在食痕が見られている。食痕の唾液のDNAで種判別できるキットもある。(八代田委員)

●議事(5)令和元年度屋久島世界遺産地域のモニタリング調査計画(意見聴取)

資料5-1 令和元年度 屋久島世界遺産地域管理計画に基づく事業及びモニタリング調査等計画・翁岳、石

塚山、高盤岳はモニタリングされないことになっているが、利用している人はいる。こういうところは、どんどん人が入ってしまう可能性があるのも、早めに対策をとってほしい。(大山委員)

- ・モニタリングにコストの制約があるのであれば、モニタリングを廃止するのではなく、モニタリング間隔を10年に1回、5年に1回としてモニタリングしておくことが重要だと思う。(柴崎委員)
- ・登山道は、利用実態があるのであれば、公園計画に位置づけられていない理由でモニタリングを廃止するのではなく、代替案が必要だと思う。(柴崎委員)

資料5-2 令和元年度 屋久島世界自然遺産地域における森林生態系に関するモニタリング調査等計画・5月

18日の豪雨災害の影響を受けて、必要と思われるモニタリング(重要な出水箇所の水量把握など)は、今後のモニタリング項目に入る可能性はあるのか。(柴崎委員)

- ・緊急時の大きな流れについてのモニタリングに関して、山中の閉じ込められるような事態にすぐに活用するという仕組みがあるほうがいい。雨量に関しては、過去に議論した経過があるが、欠損が多い。雨量観測は、気象観測の中でも一番厄介だが、屋久島の場合、雨量データは非常に重要なので、データがしっかり取れる仕組みを専門家に意見を聞いて検討したほうがいい。専門家としては、気象学と森林水文学の両方から意見を聞いたほうがいい。(矢原委員長)
- ・現実にはヤクスギランドのように比較的利用が多くて、設置が容易な場所に雨量計を置いていると思うが、設置箇所が今の場所でいいかということも含めて専門家に相談されたほうがいい。(矢原委員長)
- ・雨量を正確に計るためにはあまり木が茂っていないある程度オープンとなったところで、道路や施設があるところに限られる。(矢原委員長、下川委員)
- ・現状では雨量データを山岳地の利用や避難に生かすのであれば、リアルタイムに把握できる仕組みにする必要がある。(下川委員)

●議事(6)令和元年度第1回屋久島世界遺産地域科学委員会ヤクスカ・ワーキンググループ及び特定鳥獣保護管理検討委員会合同会議について(報告)

資料6 令和元年度第1回屋久島世界遺産地域科学委員会ヤクスカ・ワーキンググループ及び特定鳥獣保護管理検討委員会合同会議について

- ・ヤクスカWGで議論した森林生態系の管理目標について、遺産地域全体に関わることなので科学委員会できちんと示してほしい。(土屋委員)
- ・ヤクスカWGにおける生態系の管理目標の検討結果については、科学委員会と共有するために、次回の委員会において丁寧に報告をしてほしい。(矢原委員長)
- ・捕獲の仕組みが持続的なやり方で今後続けられるのかどうかなど、地域の日線の情報提供すべきである。かなりの補助金も投入されているが、どういった効果を生んでいるのかが見えてこない。(柴崎

委員)

## ●議事(7)関係会議の報告

### ①山岳部利用のあり方検討会(意見聴取)

資料7-1 屋久島山岳部における利用のあり方検討について

### ②高層湿原保全対策検討会(意見聴取)

資料7-2 屋久島世界遺産地域における高層湿原保全対策検討会(令和元年度のモニタリング調査等の計画)

- ・利用者に対して違和感のある措置であれば、説明板みたいなものでの説明が必要だろうし、あまり見えないものであればあえて表示しないという判断もある。(柴崎委員)

## ●議事(8)屋久島世界遺産地域管理体制について

資料8 屋久島における世界遺産管理体制、管理計画について(たたき台)

- ・屋久島の特徴は、保全と利用のバランスをいかに取るかというところにあるため、これからのことを考えると、科学委員会の委員の中にランドスケーププランニングもしくはランドスケープアーキテクチャの専門家が1人必要ではないか。(土屋委員)
- ・科学委員会自身はステークホルダーではなく、助言する機関、役割だと思う。この資料には科学委員会と地域連絡会議の直接のつながりが書けていないので、整理すればかけるのではないか。科学委員会が地域連絡会議と一緒にステークホルダー的にふるまってしまうことがないように十分注意することが大事だと思う。(松田委員)
- ・科学的に進言した結果が事業として行われる以上は、完全中立で透明でありステークホルダーではない存在としての立場というのは無理だと思う。屋久島という地域で何らかのかかわりを持つ以上は、より長期的な視点を持ったステークホルダーという位置づけのほうがいいのではないか。(柴崎委員)
- ・前回の問題提起に、非常に真摯に対応していただきありがたい。方向性について特に異論を挟むつもりはないが、科学委員会と地域連絡会議との関係性を考えてほしい。地域連絡会議の構成員についても重要であるため検討してほしい。(土屋委員)
- ・事務局(行政)と科学委員会、その他の委員会は役割が違う。科学委員会で様々な議論があっても構わないが、最終的には行政が決断して、責任を持つということだと思う。その場合、行政当局、事務局は専門家が言っていることに対して誠実に答える姿勢が必要である。(小野寺委員)
- ・世界遺産という枠組みでは人間要因は離れており、自然のみの評価になる。一方、地域そのものは人間というファクターが非常に大きく、それを重ね合わせたものが同時に存在していて、その価値は大きいということを認識しておくことは非常に大事だと思う。(日下田委員)
- ・世界自然遺産の仕組みだと、人間の活動、価値を評価する仕組みが昔に比べてなくなってしまう。IUCNのチェックリストではそういう部分はあまり評価してもらえないが、人間の活動、価値も含めたことをわれわれが評価するということをこの場で合意できれば、大いに結構なことではないかと思う。(松田委員)

●議事(9)その他

県道屋久島公園安房線に係る事前通行規制基準の改定について(お知らせ)

- ・改定された道路規制の基準でも検証報告の中で抜けている点として、土砂災害の場合は、当日の雨だけではなく、それまでの雨量をどう評価するかというのが非常に大事になることを指摘する。(下川委員)

令和元年5・18荒川降雨災害検証報告

- ・屋久島公認ガイドであれば安全により配慮して山に入らずに中止するであろうと思うが、そういう機能があったのか。ない場合には、そういった機能を発揮させるような仕組みにしていくか議論すべきと思う。(柴崎委員)
- ・屋久島の山はいつ何時でも危険がある可能性があるので、警報だけではなく、現場での判断が尊重されるべきである。場合によってはガイドさんが中止する決定権を明確化しないと、ガイドさんの命も危なくなる。このため様々な網を強化していくことが一番大事だと思う。(柴崎委員)